

育児体験記が伝える 「子育てはかけがえのない時間」



全老連女性委員会設立20周年記念事業としてこの春刊行した『泣いて、笑って、昭和の子育て。』(以後、『昭和の子育て』)は、慣れない育児に不安を抱えて過ごしている孫世代のお母さんに、おばあちゃん世代もかつて迷い悩みながら育児に奮闘してきた日々があったことを伝え、母としての思いを共有したいと作った本です。寄せられた500余編の

家族へのメッセージを綴った体験記

寄せられた体験記には、たくさんエピソードや母としての思いが綴られています。本に掲載されたことで、子や孫をはじめ多くの読者にその思いが届いています。掲載された方々の感想を紹介します。

●娘に書き残したかったこと

秋田県大仙市老連 斉藤ミネ子
貧しい暮らしの中で、まだ小さかった娘にも我慢をさせたことが、ずっと心にひっかかっています。今回、こうして当時の思いを書き残すことができ、娘も「お母さんいろいろしたね」と言ってくれ、嬉しく思いました。娘は看護師として勤めている老人ホームで、『昭和の子

育児体験に共通していた思い、それは「子育てはかけがえのないひとときである」というメッセージでした。

完成した本は、多くの孫世代のお母さんたちに読んでもらえるように、市区町村老連を通じて、全国の子育て支援の関係団体に寄贈されたり、会員を通じて子や孫に届けられました。また、新聞やラジオ、テレビなど多くのマスコミに紹介されたことで、老人クラブの枠を超えて、多くの人に読んでいただくことができました。本号では、この間の育児体験記の広がりをご紹介します。

育て』を読み聞かせたり、回し読みをしてもいい、お年寄りから「懐かし」と声をかけられているそうです。

●厳しい環境での家族の絆

沖縄県南城市 山田君子
身重のからだで宮崎に疎開し、病院もない地域で、母の介助で出産、食糧難の中で育児に取り組んでいた当時の暮らしに、長男は、「母と私の」親子の絆を強く感じ、自分が生きていく中で「感謝」、生きる希望がわいてくる」と涙声で言ってくれました。本書には、沖縄の方の体験が他にも掲載されており、沖縄の人は戦後とても貧しい生活の中、生命そのものを育むことに懸命であったことを改めて感じました。

●障害者を知ってもらいたい

東京都新宿区 山本量枝
「障害者のことを多くの人に知ってもらいたい」という思いで、障害のある兄弟、励ましてくれた二人の母について書きました。できあがった本を地域の親の会に届けたところ、会報で紹介してくださいました。7月には、都下の障害者団体の集まりに招かれて、体験記を朗読、

「この時代も変わらぬ母の愛」 読者のたより

育児体験記の発行以来、全老連にはたくさんの方々の感想が寄せられています。その一部を紹介します。

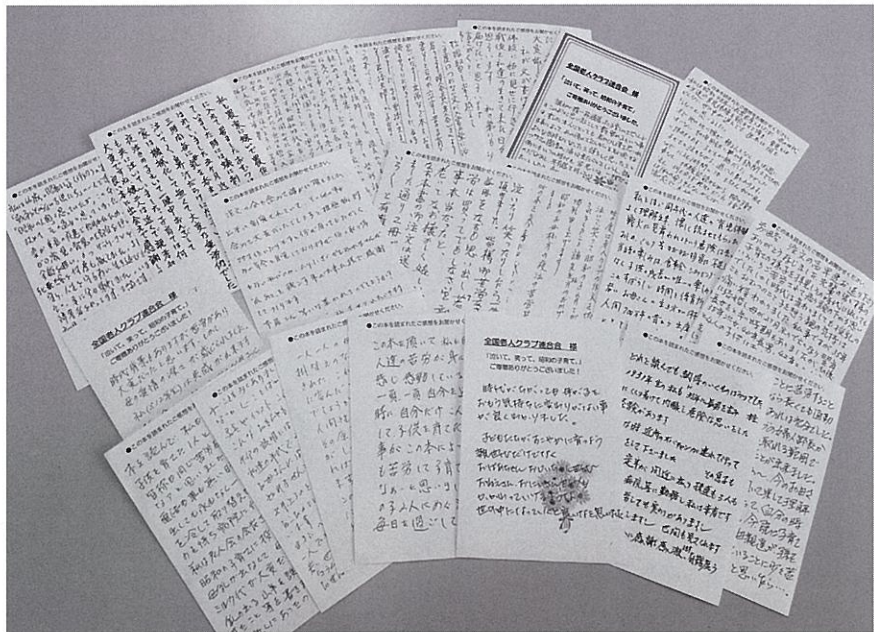
●新米ママからのお便り

今、6か月の息子の新米ママとして育児に奮闘しております。この本を読ませていただき、人を育てる根っこは同じであると感じました。自分のことより子どもを優先し、子どもを深く愛する親の思いは変わらない…。今後、育児で悩んだときには、この本を読み返して、励まされながら頑張りたいと思います。

(千葉県・40歳・女性)

●母親の深い愛は普遍

母親の子どもに対する想いと深い愛は普遍であり、どの時代も共通のものであることにも心打られました。知らず知らず、自分の母親や祖母の姿を本の内



たくさんの感想が寄せられました

育児体験記が伝える
“子育てはかけがえのない時間”



大仙市老連女性部リーダー研修会でも取り上げました

体験記を朗読

『昭和の子育て』を子育て支援につなげようとクラブ活動に取り入れているところもあります。

秋田県大仙市老連大曲地区では、女性部が中心となって取り組んでいる「手話勉強会」と「読書会」でこの本を取り上

『昭和の子育て』で子育て支援

点を見つけ、高齢者からのエールとして若いお母さんたちに伝えたいと思いました。執筆の方々とお会いして感じたことは、みなさん、「今はいい思い出」として話されていたことです。子育ては苦労が多いと思いますが、それを乗り越えた先には、必ず笑って思い返せる日が来ることを感じました。一方で当時の思い出を話されるときは数十年前の出来事にも関わらず、涙ながらに話されて、それだけ人生の中でも子育てというのは大きなウエイトを占めているということを感じました。番組は東海地方で放送された後、全国でも放送され、終了後に「全般的に悩んでいることはいつの時代も同じで、それがわかっただけで気が楽になった」などの感想が寄せられています。

活動場所となっている市民交流プラザは、若いお母さんも多く利用しています。近頃は、会員の接し方に変化ができていくそうです。女性部長の伊藤八重子さんは、語り合う活動を通じて、掲載された体験をじっくり読んでもらうことと、自分の子育てを思い出して語ることを通じて、現在、子育てをしている人に対する思いが近くなっていると感じています。「これからも『昭和の子育て』をもっと多くの人に読んでもらいたい、あの頃を思い出して、子育て支援につなげたい」と語っています。

左利きを矯正しようとした体験記を、選んで朗読しています。会員は、心に残った部分に線をひいたり、自分と重なる体験に当時の思い出しながら朗読しています。

お姑さんに「親のしつけが悪いから」と言われて、悩んだ思い出を語りました。同じ体験記を選んだBさんは、「左利きでも大丈夫」と励ましてくれた夫の言葉を思い出したと語りました。誰もが母の顔になって、次から次へとエピソードを語り始めるのです。

高齢者のエールを伝える

NHK名古屋放送局 元木達也
インターネットで昭和の子育ての本の出版を知って取り寄せたところ、内容に今の時代のお母さんの苦労にも結びつく

確かにありました。

この本を通じて、学生は高齢者の情感にじかに触れ、ひたむきさに共鳴させられた、そんな体験になったように思っています。そして親や祖父母への思いが掘り起こされ、まだ見ぬ我が子と向き合ったような、そんな感覚になっているように思っています。『昭和の子育て』の中には、生きることの豊かさや奥深さが、静かに、確かにありました。

・子どもは親が真剣に生きる姿を見て育つ。
・子育ては大変だけど、希望に充ちている喜び。
・自分も愛情をもって、子育てに臨みたい。
○家族への感謝の思い
・母親に、感謝しなければならぬと思った。
・親がしてくれたことや苦労を思い起こした。

『昭和の子育て』の広がり

大学の授業やマスコミにも登場しました。

●学生に生きることの豊かさを伝えてくれた

新潟県立大学非常勤講師 丸山仁
担当する高齢者福祉論の授業の中で、保育士・社会福祉士を目指す4年生に育児体験記を読んでもらい、手紙形式のレポートの提出を求めました。学生が感銘を受けた部分や感想を抜粋して紹介します。

○「関わり」の中での子育て
・オムツなどの物資は少ないが、助け合う気持ちはむしろ豊かであった。
・子育ては隣近所で、地域でするもの。
・便利ながらいいことではなし。
○真っ直ぐな子どもへの愛情
・どの親も子どもを一心に大切に思っている。
・授乳が至福の時、羨ましく素敵なこと。

とことして残すために。

(福岡市・66歳・男性)

容に重ねて読み進んでいました。幅広い年代の方々の実体験だからこそ迫りくるものがあります。どの時代も母は強い！

(福島県・子育てNPO職員)

たくさんのお母さんの中に、男性からのお便りもありました。

●息子たちの嫁にプレゼント

26年前、妻が重症の疾患で倒れたため、



大学の教材にも採用されています

1歳児とゼロ歳児の育児の大部分と、家事全般を担いながらサラリーマンを続けました。子どもたちの命と人生を守るため、ただその一事に全力集中しました。今回、2冊求めました。1冊は長男の嫁のため、2冊目は未来の次男の嫁のため、昭和の人間の遺言のひ